
スタートライン

森乃さつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スタートライン

【Nコード】

N4132Z

【作者名】

森乃さつき

【あらすじ】

答えなんて知らない、必要ないけど、見つけたい自分たちだけの答え。要と千紘。周りから似ていると言われがちな二人のお話。

「寝過ごした……」

8時30分、完璧に遅刻コースだ。

いつもならもうとつくに家を出ていてあと少しで学校に付くであろう時間帯。

こういうとき、自分の家から学校までの距離が長いことを痛感させられる。

急いで行っても一時間目には間に合わない。

どうせならゆつくり行こうかと思いつながら洗面所に行き顔を洗った。さすがに冬の朝は寒い。顔を洗っただけでもすでに吐く息は白くなっていた。

朝食を取るうかと、パンを焼いていたところで携帯が鳴った。要から電話だった。

『おはよう。今日遅いけどどしたの？もしかして休む？』

いつも自分より早く来ている人が来ていないから、不思議に思ったのだろうか。

考え事のしすぎで眠れなくて寝過ごしたのなんて初めてのことで、自分でも少し驚いている。

「おはよう。ごめん、寝坊した。少し遅れるけどちゃんと行くよ。」
僕はそう返事をして、焼いたパンを口に運んだ。

『寝坊？千紘が？』

「そう、俺が」

『へえ、珍しい。とうとう本格的に雪が降るかもね？』

全く。いつもこの調子だ。

要は割と真顔で冗談とか言えるタイプだから嘘か本気が分からないことが多々ある。

「どういう意味」

『さあ？それよりなるべく早く来なよ？一時間目は数学だからいいとしても、二時間目現国だよ』

そうでした。いやだな、二時間目から現国なんて。

いや、この際時間帯とか関係ないな、現国自体苦手教科なんだから。

「忘れてた。現国だけは先生の話聞かないと全く分からないしな」

『だね。それにしてもなんで私たちって現国だけ苦手なんだろうね』
そう言っただけが苦笑した。

「文章問題のさ、「この作者の考えを述べよ」だっけ？無理、分からない」

『わからないよね。あと漢字もさ、難しいのばかり』

「常用漢字だけ読めて書けとけば、とりあえず問題ないと思うんだけどなあ」

『そうだね。ま、それはそれとして。そういうことだから早く来るんだよ、千紘くん』

最後の方の言い方が少し気になったけど、はいはいと言って電話を切った。

「さてと」

昼と夜は抜いても構わないけど朝だけはしっかり食べることに。

そう教わったけど、今日はパン一枚で昼までもってください、俺のおなか。

返事が来るはずもない自分のおなかに心の中でそう言った。
そんな自分を、馬鹿みたいだなと笑いながら、身支度を済ませ、外へ出る。

「うわ……さつみい……」

天気予報で今日は暖かくなるって聞いたから油断していた。
家の中にいるよりもはるかに外は寒かった。

手と耳が冷たくてじんじんする。これは絶対に赤くなってる。
マフラーをしてきたから首元はなんとか救われてるけど、外の気温の方が勝っているから、実際のところマフラーなんて大して意味がない。

コートでも羽織ってこなきゃこの寒さはしのげないだろう。ちなみにカイロは使ったことがない。

昔から寒かったら着るようになっていた、家の中でも、もちろん外でも。

学校には各教室にストーブがひとつ設置してあるのだが、今までは付けていなかった。

ただどここんなに寒いんだ、いい加減付いていてもおかしくないはず、そんな小さな希望を持ちつつ学校へと向かう足を速めた。

「あ、千紘、おそよ」

教室に付くと要が声をかけてきた。

今はちょうど1時間目が終わったあとの、10分休憩時間中のようだ。

「そんなに遅く起きたわけじゃないから、おそよでもないって」

「でも、いつもより起きたの遅かったんでしょ？じゃあ、おそようでいいよね」

「わけのわからんことを」

目的の現国前に学校に行くことができたから、とりあえず良しとしよう。

ストーブは付いているようで教室の中は暖かった。

大袈裟かもしれないが寒い外からきた俺にとっては天国のようだった。

「千紘、耳真つ赤。ああ、手も」

要がそう言った。

寒い中、防寒対策を全然してこなかったわけだし、当たり前だろう。それでも俺が歩いている間この暖かい所にいた要が少し憎らしくなつて、少し言い返してみた。

「要さん、廊下に出れば、その理由がわかりますよ。ささ、廊下へどうぞ」

「やだな、千紘くん。私は教室と友達なんですよ？離れる必要はありません」

また、わけのわからないことを真顔で。

それにしても、

相変わらず馬鹿みたいなことを言っている俺たちの、この関係は何と言っのdarouか。

昨日の夜にずっと考えていたことがふと頭をよぎった。

考えても仕方のないことなんだろうけど、気になってしまった。

気になったから考えた、でもわからなかった。

友人、という言葉で終わらせてしまっ方がいいものか。

自分の中で納得のいく答えが見つからなくて非常に気持ちが悪い。

「ん、どした？ やっぱり具合悪い？」

ふいに、要が顔を覗き込んできた。

どうやらぼーっとしてしまっっていたらしい。

「いや、なんでもない。もう休憩時間終わるだろ、授業の準備しないとな」

もしかしたら自分の悩みはちっけなことかもしれない。

相談しようと思えばすることもできるが、今は言わないでおくことにした。

「ん、ああ、そうだね。現国の先生が千紘を指名しますように」
要は嫌なことを言い放って自分の席に戻っていった。

「あいつ……」
もし指名されたらと考えるのはやめておこう。指名されても答えられる範囲ならば大丈夫。

マイナスには考えないようにしよう、そうだ、俺、大丈夫。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4132z/>

スタートライン

2011年12月15日03時48分発行